

ゴールディングにとってのディケンズ——障壁転じて救いとなす

2024年6月8日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部令和6年度春季総会

宮原 一成

(関西学院大学教育学部)

0. William Golding (1911-93) 作品リスト

Poems. London: Macmillan, 1934.

Lord of the Flies. London: Faber and Faber, 1954.

The Inheritors. London: Faber and Faber, 1955.

Pincher Martin. London: Faber and Faber, 1956.

“*Envoy Extraordinary*”. London: Eyre and Spottiswoode, 1956.

(小説家3名による作品集 *Sometime, Never* に収録された短編)

The Brass Butterfly: A Play in Three Acts. London: Faber and Faber, 1958.

Free Fall. London: Faber and Faber, 1959.

The Spire. London: Faber and Faber, 1964.

The Hot Gates and Other Occasional Pieces. London: Faber and Faber, 1965.

(随筆や書評を集めたもの)

The Pyramid. London: Faber and Faber, 1967.

The Scorpion God: Three Short Novels. London: Faber and Faber, 1971. (短編集)

Darkness Visible. London: Faber and Faber, 1979.

Rites of Passage. London: Faber and Faber, 1980.

A Moving Target. London: Faber and Faber, 1982.

(随筆や書評を集めたもの)

The Paper Men. London: Faber and Faber, 1984.

An Egyptian Journal. London: Faber and Faber, 1985. (随筆風の旅行記)

Close Quarters. London: Faber and Faber, 1987.

Fire Down Below. London: Faber and Faber, 1989.

To the Ends of the Earth: A Sea Trilogy. London: Faber and Faber, 1991.

(*Rites of Passage*, *Close Quarters*, *Fire Down Below* を三部作として一卷にまとめたもの)

The Double Tongue. London: Faber and Faber, 1995. (未完成遺稿)

まと
もな
長編
小説
が書
けな
い
ス
ラ
ン
プ
期

0-1. 本発表で主に扱うゴールディング作品の紹介

***The Pyramid* (1967)** (『我が町、ぼくを呼ぶ声』井出弘之訳、集英社)

英国の架空の町スティルボーンを舞台とし、オリヴァーという男性を共通の主人公とする中編小説 3 編が、緩い3部構成をなしている本。

第1部 町の薬剤師の息子で高校生のオリヴァーは、高嶺の花であるイモジェンへの片思いに苦しみ、性欲のはけ口として下層階級の娘エヴィを利用する。しかしそのエヴィも、医師の息子ボビーと奪い合う対象だった。オリヴァーはボビーを出し抜きエヴィと関係を持つが、それを世間にはひた隠しにし、複数の男たちから「公衆便所」扱いされているエヴィの苦々しい思いには耳を貸さない。彼の父親

は二人の性交の現場を目撃し、下層階級者と交わるなど息子を強く諭す。大学進学したオリヴァーは最終学年で帰省したとき、エヴィに再会し、パブの客の前で過去の「強姦」のことを晒されてしまう。

第2部 大学1年生の冬に帰省したオリヴァーは、町の素人芝居の上演計画に無理矢理参加させられる。芝居の主演は上層階級のノーマン（イモジェンは彼の妻となっている）で、自分中心の演出を主張するが、オリヴァーの母は自分の息子にスポットライトを浴びさせようと、しょっちゅう演出に口をはさむ。渡り者の演出家イーヴリンはこの緊張関係をうまく受け流しながら舞台準備を進めたが、上演はオリヴァーがへまをしたせいで結局台なしになる。イーヴリンに謝罪に行ったオリヴァーは、イーヴリンの前でこの町の偏狭さに対する愚痴を漏らす。イーヴリンはその気持ちを共感的に受け止める。

第3部 オリヴァーは子ども時代から、ミス・ドーリッシュ（あだ名はバウンス）という未婚女性からバイオリンを習っていた。バウンスは人生を楽しむことを父親から禁じられ、音楽に身を捧げる生き方を強いられてきた。自動車修理工のヘンリーが町に到来すると、バウンスは人目を気にせず彼と階級違いのデートを重ねるようになる。しかしヘンリーは、バウンスの資産を元手に修理工場を開いた後、別の女性と結婚する。バウンスは正気を失い、奇行に走るようになった。オリヴァーは中年の家庭人になって帰省したとき、バウンスの墓を見て、自分がいかにこの女性を嫌っていたかを悟り、自分はヘンリーと同種の間人だと知る。

Rites of Passage (1980) (『通過儀礼』伊藤豊治訳、開文社出版)

トラファルガー海戦の記憶もまだ新しい頃、英国青年貴族のエドモンド・トールボットが行政職を奉じてオーストラリアに赴任するため客船兼軍艦に乗船する。小説は、彼がその船旅日記を後ろ盾の大物貴族に宛てて面白おかしく書きつづる形式をとっている。

艦内では絶対の権力を授けられているアンダーソン船長に対しても、無頓着に貴族風を吹かせてトラブルを起こすのだが、トールボット本人はいい気なもので全く自覚していない。船内で目をつけた女性乗客と行きずりの火遊びをしようと機会をうかがうなかで、牧師のジェイムズ・コリーをおだてて礼拝式を行わせ、それを隠れ蓑に利用しようと画策する。階級を成り上がった牧師コリーは小心者ではあるが、聖職者である矜持から船長権限を無視したために船長の不興を買い、さらには乗組員全員の揶揄と冷笑の的になっていた。コリーはトールボットの「篤信」に感激し、彼を慕うようになるが、トールボットはそんなコリーを鬱陶しく思う。

やがて、赤道通過祭の無礼講さわぎに乗じてトールボットがこっそり情事を果たしているさなか、コリーはトールボットのあずかり知らぬところで、船員たちから肉体的辱めを受ける。祭りの後コリーは抗議のため荒くれ船員たちの中に入り込んでいくが、再び姿を現したときコリーは水夫服姿であられもなく泥酔しており、ご婦人たちもいるというのに、公衆の面前で楽しげに放尿する。トールボットは笑劇でも見るようにただ面白がって成り行きを見ていたが、コリーは恥辱のあまり船室に引きこもり、食を断ちそのまま絶命する。トールボットはひよんな事からコリーの書き残した長い手記を入手する。それは屈辱と忍耐の記録であり、トールボットへの深い敬意から彼の言動をすべて好意的に解釈していたことも綴られていた。トールボットは驚き自己反省に駆られるものの、まだ自分の未熟さを十分自覚するには至らない。

のちに続編（1987年）と続々編（1989年）が書かれ、三冊で *To the Ends of the Earth: A Sea Trilogy* (1991年)へとまとめられた。 (『ブッカー・リーダー』 186を一部改変)

本日の発表内容

1. スランプに陥るゴールディング
2. 休筆期に行った活動と スランプ脱出との関係
3. 1977年の講演内容に注目
4. 講演の中でディケンズに言及 その重要性
5. ゴールディングとディケンズという取り合わせの意外感
6. ゴールディングがディケンズから学んだこと
7. まとめ

1. スランプに陥るゴールディング

1959年発表 *Free Fall* がきっかけ

1970年代終わり頃まで 長編小説がまともに書けない状態

2. 休筆期（1964–79年）に行った活動（活字の形で記録がたどれるもの）

新聞・雑誌の記事（書評含む）：30本

英米の大学に招かれて行った講演

特に注目したい講演：“Rough Magic”（1977年2月16日実施）

3. 講演 “Rough Magic”（1977）に注目

講演の主旨

- ① 登場人物に実在の人間のような、ちょうどいいあんばいの現実的存在感を持たせることが、作家の仕事
 - ・読者の“willing suspension of disbelief”を促進するため
 - ・読者が登場人物について勝手な解釈を膨らませるのを防止するため
- ② 作中の主要な登場人物が、継起する出来事を通して変化や進展を遂げるプロセスを書け
 - ・動きに乏しい静的な情景描写や長々しい内的独白には、読者はすぐに飽きてしまう
 - ・最小限でもよいので、「継起する出来事」として、登場人物には何らかの動作や変化を必ず持たせるよう心がけよ

4. ディケンズ作品を引き合いにして主旨を例示するゴールディング

①の主張に関しては、*The Pickwick Papers* を引き合いに（実は主張②にも関連）

〔読者が抱くピクウィックの人物像は、本の挿絵が示す外見に大きく影響されているのは確かだが、しかし〕 whatever reality Pickwick has as a character arises from his movement through the book's rhetoric in a series of actions of monumental stupidity. The true reality of Pickwick that stays with us is **Dickens's own discovery that inside the drawing of a pathologically fat and complacent fool there is a core of steel**. Mr Pickwick goes to jail rather than comply with an unjust demand for damage. In those days of serial publication the change was not foreseen by Dickens but it turns Pickwick from an impossibly farcical figure into a man. That was not done by engravings but by rhetoric deployed *in extenso*. (Golding, "Rough" 140)

キャラクターとしてピクウィックが備えている現実味はすべて、この本独特の語り口を通して伝えられる、途方もない愚行の連続のなかで彼が見せる動き（変化）から生じているのだ。私たち読者の印象に残るピクウィックの真の現実とは、挿絵が示す**病的に肥満した独りよがりの愚か者の姿の内側には鋼でできた芯がある、というディケンズ自身が発見した**事実なのである。ピクウィック氏は、損害賠償金の不当な請求に応じるより、牢獄に行くほうを選ぶ。ピクウィック氏のこの変化は、連載形式で作品が発表されていた当時には、ディケンズ自身も予見していなかったものなのだが、この変化のおかげでピクウィックは度しがたいほど喜劇的な人形から一箇の人間へと変貌するのである。それは銅版画のなせる技ではなく、存分に発揮された筆力によって成し遂げられたものだ。

②の主張に関してゴールディングは *Martin Chuzzlewit* からの次の一節を題材にする

'I'd better knock,' thought Tom, 'sooner or later; and I had better get it over.'

Rat tat.

'I am afraid that's not a London knock,' thought Tom. 'It didn't sound bold. Perhaps that's the reason why nobody answers the door.'

It is quite certain that nobody came, and that Tom stood looking at the knocker; wondering whereabouts in the neighbourhood a certain gentleman resided, who was roaring out to somebody 'Come in!' with all his might.

'Bless my soul!' thought Tom at last. 'Perhaps he lives here, and is calling to me. I never thought of that. Can I open the door from the outside, I wonder. Yes, to be sure I can.'

To be sure he could, by turning the handle; and to be sure when he did turn it the same voice came rushing out, crying 'Why don't you come in? Come in, do you hear? What are you standing there for?'—quite violently.

Tom stepped from the little passage into the room from which these sounds proceeded, and had barely caught a glimpse of a gentleman in a dressing-gown and slippers (with his boots beside him ready to put on), sitting at his breakfast with a newspaper in his hand, when the said gentleman, at the imminent hazard of oversetting his tea-table, made a plunge at Tom, and hugged him.

'Why, Tom, my boy!' cried the gentleman. 'Tom!'

'How glad I am to see you, Mr Westlock!' said Tom Pinch, shaking both his hands, and trembling more than ever. 'How kind you are!' (Qtd. in Golding, "Rough" 130)

5. ゴールディングとディケンズ 取り合わせの意外感

意外その① 「あのゴールディングが、キャラクター造形について一席ぶっている」

- ・現実味のあるキャラクターが書けないことで定評のあったゴールディング

“so conspicuously *sui generis*, his own writer, his own school of one”
(John Fowles 150)

- ・ゴールディングの独自の作風とは

What man is, whatever man is under the eye of heaven, that I burn to know and that—I do not say this lightly—I would endure knowing. The themes closest to my purpose, to my imagination [that] have stemmed from that preoccupation, have been of such a sort that they might move me a little nearer that knowledge. They have been themes of man at an extremity, man tested like building material, taken into the laboratory and used to destruction; man isolated, man obsessed, man drowning in a literal sea or in the sea of his own ignorance. (Golding, “Belief and Creativity” 199)

人間とは何か。天の目から見た人間とは、そもいかなるものか。それが、私が身を焦がすほどの思いで知りたいものであり、そして知ることができれば——これは軽い気持ちで口にしているのではありません——その知識の重荷に耐える覚悟なのです。私の目的に最も近いテーマ、あるいは、今述べた専心から芽吹いた私の想像力に最も近いところにある作品主題は、その知識に向かって私を少しでも近づけてくれそうな性質のものでした。それは、極限状態に置かれた人間という主題でした。いわば建築資材のように、実験室に運ばれて破損するまで耐用検査にさらされる人間です。たとえば、隔絶された人間、偏執に取り憑かれた人間、文字通りの海で、あるいは自らの無知という名の海で、溺死しかけている人間など。

意外その② 「あのゴールディングが、ディケンズを頼りにしている」

- ・ディケンズ読書体験は、幼少期のゴールディングに作家の道を諦めさせた

- ・1961年ゴールディングが米国 UCLA で行った講演（伝記作家 John Carey が報告）

講演の趣旨：“how he has become the sort of writer he is—interested in ideas rather than people, and in seeing mankind in a cosmic perspective rather than an everyday social setting”（自分がどのようにしてこのようなタイプの作家になったのか、つまりキャラクターよりも概念に興味があり、日常の人間社会という場よりも広大無辺の視野において人類を捉えることに関心を向けるタイプの作家になったのか）という経緯と事情を説明すること (Carey 259)

講演内容より：When he [Golding] read Dickens's *Pickwick Papers* as a child he could see that Dickens was, by contrast, actually interested in people, and since he [Golding] assumed that this was the only way to write a novel **it put him off trying**. (Carey 259)

子どもの頃にディケンズの『ピクウィック・ペーパーズ』を読んだとき、ゴールディングは、自分とは対照的にディケンズという人は実際に人間に関心がある人なのだとすることを理解した。そして、ゴールディングはそれこそが小説を書く唯一のやり方だと思い込んだため、小説を書いてみようという気をくじかれてしまった。

幼少期のゴールディングにとってのディケンズは、小説家になりたいという願望をくじく障壁だった

そのディケンズを学び直すことが、ゴールディングのスランプ脱出に貢献したという展開

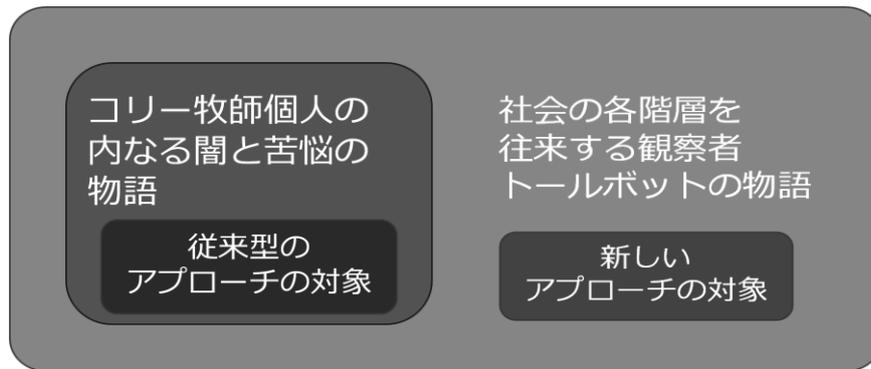
6-1. ディケンズからの学び（表層的）：習作期 *The Pyramid* に見られるディケンズの影響

Great Expectations (1860-61)との共通点

- ✓ 主人公が沼地に呼び出される場面で始まる
- ✓ 主人公が高嶺の花の女性に夢中になるあまり、身近にいる階級の低い女性の人間的価値を理解しない (以上、Johnston 92-93 の指摘)
- ✓ 婚約者に裏切られて正気を失い、着衣について正常な判断ができなくなる高齢女性の存在 (Johnston 93, Crompton 66-67 の指摘)
- ✓ 主人公(Pip/Oliver)と、いけ好かない階級上層者(Herbert Pocket/Bobby Ewan)との諍い・張り合いの構図 (Crompton 67, Boyd 119 の指摘)

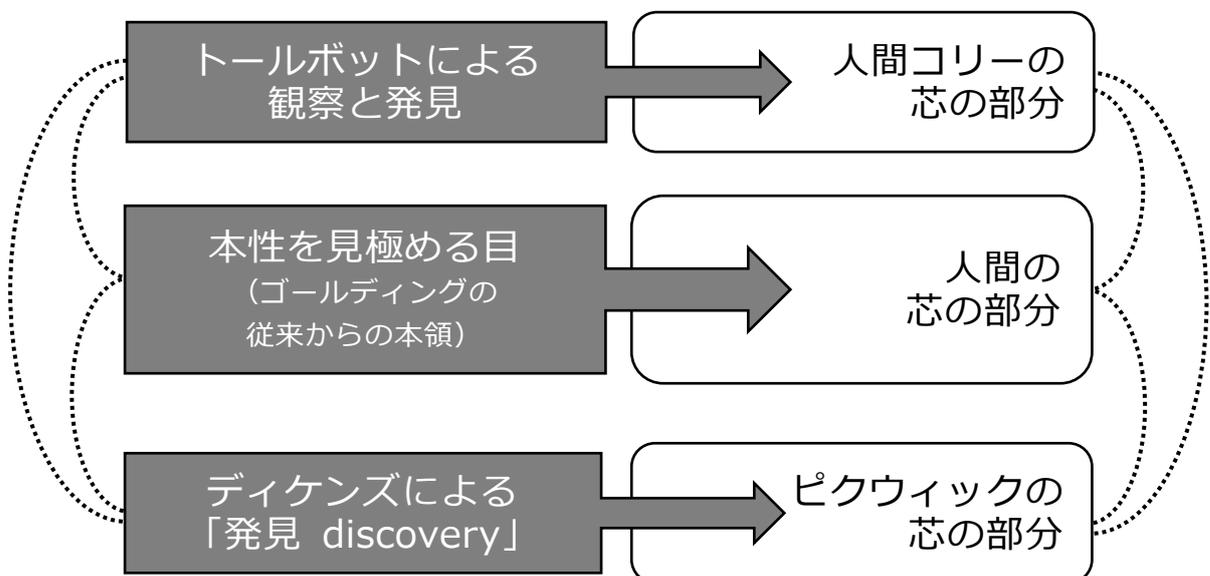
Martin Chuzzlewit との共通点も？

- ✓ 主人公オリヴァーが第1部冒頭で、自分には手が届かぬ美少女イモージェンを思いつつピアノの練習をする＝Maryを想う Tom Pinchの教会オルガン演奏練習？

6-2. ディケンズからの学び：本格的な学びの痕跡 *Rites of Passage*

6-3. 物語内世界にとどまらず、物語外世界（と物語内世界とのインタラクション）にも目を向ける

いくつかの平行で捉えてみる



7. まとめ キャラクターに対するディケンズの姿勢と、ゴールディングの本領

- ディケンズ**: キャラクター・人間に関心を寄せ続け、その人間性の《芯》を発見するまで（あるいは、発見しても）、とことんまで付き合っていく
- ゴールディング**: 人間の《芯》の部分突き止めることを目指し、意図的に、自覚的に、キャラクターを限界まで追い込む

〈似て非なるもの〉 同時に 〈非にして似るもの〉 という気づき

引用文献

- Biles, Jack I. *Talk: Conversations with William Golding*. Harcourt Brace Jovanovich, 1970.
- Boyd, S. J. *The Novels of William Golding*. 2nd ed. Harvester Wheatsheaf, 1990.
- Carey, John. *William Golding: The Man Who Wrote Lord of the Flies*. Faber, 2009.
- Crompton, Don. *A View from the Spire: William Golding's Later Novels*. Edited and completed by Julia Briggs. Basil Blackwell, 1985.
- Fowles, John. "Golding and 'Golding'." *William Golding: The Man and His Books: A Tribute on His 75th Birthday*, edited by John Carey, Faber, 1986, pp. 146–56.
- Gindin, James. *William Golding*. Macmillan, 1988.
- Golding, William. "Belief and Creativity." *A Moving Target* by Golding, pp. 185–202.
— *A Moving Target*. Faber, 1982.
- . "Rough Magic." *A Moving Target* by Golding, pp. 125–46.
- Johnston, Arnold. *Of Earth and Darkness: The Novels of William Golding*. U of Missouri P, 1980.
- "1959: William Golding: Monitor: Writers and Wordsmiths." *YouTube*, uploaded by BBC, 21 Aug. 2023, www.youtube.com/watch?v=3OvgnEXs1NI.BBC.
- 吉田徹夫監修，福岡現代英国小説談話会編．『ブッカー・リーダー—現代英国・英連邦小説を読む』．開文社出版，2005年．